

# 特集:WOC の舞台裏

## 準備の日々

6月11日

JOAの理事会のついでに、東京の慈恵医大に岡部さんを訪ねる。彼は色盲者として、色のユニバーサルデザインを手がけている。今回のWOCではリレーの地図をプリンタ印刷することを提案したが、プリンタでのオフセット色の再現とその色盲者への影響を相談するためだ。彼は作成した地図を熱心に批評してくれ、1時間半の予定が2時間半におよぶ。

7月15日

再度IOFに確認をとるも、結局、リレーの地図をインクジェットプリンタで刷るという提案は承認されなかった。確かにヨーロッパでインクジェットプリンタによる0マップを見ることはない。私たちにとってはすでに当たり前の技術も、ヨーロッパでは未知の技術なのだろう。そこにリスクと不安がつきまとうのは自然なことだ。しかしインクジェットでの印刷が可能になれば低いコストで質の高い地図、特にリレーのコース提供が可能になり、それによって潜在的なWOC開催国も増えるかもしれない。

新しい技術への不安が時に過剰なものであることは、リスク心理学の知見が示すとおりだ。その不安を理性的に解決するだけのデータを準備する時間は、すでに残っていない。イベント・アドバイザーのトニーは「君たちがどんな方法を取ったとしても、私はその決定を支持する」と言ってくれた。自分がIOFの理事でなかったとしたら、多分強行的にプリンタ印刷を利用する方法もあっただろう。

6月18日

浜松の静大工学部にある施設で、WOCプランナーと競技責任者の合宿を行った。運営者が集まって、夜中まで大会準備のための仕事をしていると、大会が近づいた実感が沸く。翌週の25日には、人事ミーティングを控えて、三ヶ日にある山徳の家に滞在。その合宿を縫って26日27日の週末はナショナルチーム有志のトレーニング手伝い。山川から「愛がこもっているな」のお褒めの言葉をいただく。

7月2日

午前中、人事のワーキングに参加した後、その週末はリレーのコースチェックやコース組み合わせの作成に費やした。男女とも



リレーの最終コントロールに使われた久魚姫。合掌しているのは、仏教徒だからだそうです。デンマークチームの女子を中心に記念撮影。来年のデンマークの役員が気に入って、「ぜひ、スプリントの第一コントロールとして使いたい!」どうやら、僕と山川のジョークは国際的にも通用したようだ。

3箇所のフォーキングがあるので、それぞれ27版にわたるリレーのコースが必要となる。0-cad 8のコースプロジェクトは不十分で、そのすべてのパターンをうまく打ち出すことはできない。54版全てを個別に作成するわずらわしい作業となった。その全てをチェックするのだけでも一苦労だったから、それを作成した田代の苦労が想像される。

7月に入ると、WOC準備に必要な時間は拡大に増えていった。特にプリテン4の原稿締め切りは10日である。僕が受け持った技術的部分だけでも20ページにものぼる。家に帰ってからのせいぜい3時間の時間ではとても完成させることができるとは思えなかった。長くてあと1月。世界選手権をメインの役員として準備することなど、一生のうちにこれが最後だろう。そういう聞かせて、昼間から大学でも仕事をしていた。

アシスタントの石原は、朝8時過ぎから夜は10時や12時まで、WOCのこまごました事務作業にかりきりだった。3月にやめた悪徳印刷業者よりも安いペイでそれ以上の時間を働いていることは確かだった。

7月24日

事前最後の現地チェックとなった。あと1週間もすれば海外チームもやってくる。仕事はいくらでもあって無限に続けるとさえ思えた。しかし、それに対する焦燥感や疲労感よりも、世界選手権の運営ができる残りたったの3週間をいと惜しむ気持ちの方が大きかった。早いチームはこの週からトレーニングキャンプを開始していた。

## トラブル続出

7月30日

春の地図チェックの時にロング予選の範囲でコースに影響する伐採を見つけて以来心配していた事態が起こった。ミドル予選の1番コントロール周辺で間伐が行われ、倒木はある程度片付けなければならないが、地図を刷りなおしている時間はもちろんない。まずは間伐材をある程度片付け、それに合わせた地図修正をしなければならない。その間伐が片付いたとして、他の場所でないという保証はない。予測できないリスクは、WOCへの不安を増大させた。

大野家からチェーンソーを借り、40分間格闘して、現地ではある程度の見通しが立った。あとは、その形に合わせてプリンタ

一で加刷をすれば済むはずだ。幸いハッチなので、べたのように色の違いは目立たない。ほぼオフセット印刷に近い色も調整できた。ところが、山川に相談すると「合わないよ」という。現在の地図は裁断を済ませている。そうなると紙の角との距離を使って位置あわせをするしかないが、刷りのチェックによって順番がぐちゃぐちゃになっているので、その基準となる距離が信頼できない。「俺でさえ 10%程度のボツが出る」というのだ。「命とりになるぞ。」その言葉に一瞬ひるんだが、そこまで脅かされたら試さない手はないだろう。成功すれば大きな達成感を得ることができるのだから。所詮ハッチなのだ。

幸いなことに武揚堂の裁断は素晴らしく、最もボツの多かったセットでさえ 5%のボツで加刷を入れることができた。

さらにこの週末のコントローラのチェックで、急斜面のコントロールを中心に、ぐらつく杭が多数発見された。山での基本的な作業は、この週末で終了と思っていたのが、振り出しに戻された気分だった。

8月1日

ウィークデーに入ると、ほとんどの役員は、いったん帰宅した。残ったのは僕と来週末が大会の杉本だけだった。それほど分量のない世界選手権の地図管理の作業でさえ、二人になるとなかなかかどらなかつた。僕も杉本も、昼間は既に設置されたコントロールを確認し、夜は地図準備の作業をするという日々が続いた。その間にもデフの小さなミスはいくつも見付き、それに対して1枚1枚シールを貼って修正するという地道な作業が続いた。幸いなのは、



最初の監督会議やや緊張気味(左)、最後はリラックスしてビア・パーティー



まだ時間的な余裕があったことだ。仏教の修行のようなその作業を僕らは淡々と続けた。

必要な資材を静岡においてきたので一度は帰ろうと思っていたが、日々の作業に追われていると、なかなか帰るチャンスがつかめなかつた。4日夜10時にいったん帰宅し、洗濯物だけ交換して翌朝は朝食も取らずに、昨日ゲットした中島を載せて再び作手に向かう。「まだ多くの仕事が残っているので、是非お手伝いいただきたい」という役員への緊急メールを見て、三井さんと宮川ゆうちゃん、さほも手伝いに来てくれた。

予選を週末に控えたウィークデーは時間的に切迫しているわけではなかつたので、夜は12時には寝て、朝も7時過ぎまでは横たわっていることができたのだが、精神的に緊張しているせいか、眠りが浅く、夜中にしばしば目覚めるため、疲れはかなりたまっていた。一緒に作手に留まっていた杉本も、このころの緊張感が最も高まって

いたという。水分はとっていたつもりだが、十分ではなかつたようで、静岡から帰ってきた5日の夕方には軽い脱水症状でダウンしてした。水分を十分とりなおし、なんとか回復。

## 世界の監督たちと渡り合う

8月6日

いよいよWOCのプログラムが始まる。まずは17:30より初めてのチーム監督会議だ。大国の監督たちの真剣さは昨年11月のミーティングの時に、肌身にしみている。しかも今回は本番なのだ。アドバイザーのトニーも、細かい質問でミーティングが紛糾することを恐れていた。事前に「うるさ方」の間を回り、想定される質問を聞きだしている。

質問は輸送のスケジュールや暑さの中での救急体制や給水の問題に集中した。技術的にはハッチグリーンの基準やコース距離の問題が取り上げられた。フィンランドのトッテが「明日のミドルでは男子と女子の距離は400mしかない、それなのにウィングタイムが同じ25分というのは本当か?」と質問した。そこで「確かに1分程度の誤差はあるかもしれない、2000年のワールドカップを覚えているか?トッテは、女子が9km近くあるのに、60分で走れるなんて思えない、と質問した。あの時、僕は5%以内での誤差はありえるといった。結果はスウェーデンのエンマが63分だったよね。」と答えた。

翌日の結果は、シモーネの優勝タイムが26分。トッテはその後の監督会議で一言も質問をしなかつた。

8月7日

いよいよ世界選手権が始まる。自分のこれまでの記憶をたどってみても、不成立になった世界選手権はない、あらゆることに何重ものチェックをかけ、ミスなんて出ないと思っても、不安と緊張はぬぐい去れなかつた。

特に予選では、選手側からは分からないヒートへの割り振りがある。配布用位置説明と地図の全てに選手名やスタート番号のシールが貼られる。その地図や位置説明を



事前準備の光景(左)。時にはデフにシールを貼るという地道な作業も



これだけのコントロールユニットがそろうことも、二度とないかも。右はそのコントロール設置に活躍したコース管理パートの若者たち



配布間違えただけで、大きな問題が発生する。そして、何度チェックしたとしても、最後の最後にヒューマンエラーが出てしまう可能性はぬぐえなかった。トニーが位置説明を配布するプレスタートに、僕がスタートにつき、バックアップする。

給水の位置やセッティングは、現地で確認していないものの一つだった。今回選手たちは給水体制に非常にナーバスになっている。公平な競技を保つためにも、常に水を絶やさず提供する必要がある。給水係に聞くと、足りなくなった水は野外教育センターまで取りに行くという。往復で30分以上はかかるだろう。トレインの中にはオリエンティアの河合さんが住んでいる。そこで水をもらってはどうかと提案し、河合さん宅を訪れると、河合さん本人はいなかったが、快く了承してくれた。大きな組織となると、こんな情報も全体にはいきわたっていないものだ。

この日、日本チームは男女とも二人づつの予選通過に沸いていた。それは画期的なことだったが、自分自身は3年にわたってコーチをしてきた田島利佳が予選を通過できなかったことに残念な思いを残した。

この日は会場を早々と後にして、イベントセンターで翌ロング予選の抽選、配布物の袋詰めを確認して、再び監督会議に臨む。1レース経験することで、こちらの手のうちが見える。それに対する数々の厳しい質問、トリビアルな質問が出て、易壁する。株主総会で総会屋からつるし上げを食らう社長ってこんな気分なのだろう。会議が終わったときにはぐったり。

8月8日

ロング予選は、手続き的には前日の繰り返しで、全ての役員が同じ作業を受け持つ。その分余裕も出たので、マウンテンバイクで会場に向かう。車で20分のところを30分もあれば到着できた。

この日、初めて道路を誘導する区間がある。初めての部分ではなにかと不都合が発生するものだ。そう思って第一の誘導区間を訪れると、案の定、現場の役員は誘導テ

ープの巻き方について、十分な教示を受けていないようだった。おまけに誘導区間終わりの給水の裏は急な崖で、その下の川に下りることが不可能になっていた。地図には表記されているものの、危険が予想されるその場所に、即興でテープを巻いて解決。スタート到着はスタート開始1時間を切っていた。

この日、男子の通過はなかったが、女子は二人が通過した。宮内は当然と言えば当然だが、元木の通過は予想外だった。チーム関係者はもちろん、運営者もそのタイムに心を躍らせた。このことが、後に致命的なミス引き金となるのだが、この時はまだ誰もそのことに気づいていなかった。予選が問題なく終わったことに満足感を感じて、イベントセンターに戻った。今日は監督会議がないと思うと、解放感を感じる。

## なんて素敵なジャパネスク

8月10日

スプリントの予選と決勝がある。

「やっぱ、遠来のお客さんを歓迎するには民族衣装の正装でしょ。紋付袴を着るっきゃないですよ」と実行委員長の福田さんをそそのかし、開会式は二人和服で臨んだ。

競技が終わって、17:30までに万博会場へ選手や10Fの役員をバスで運ぶのは、計画的にも厳しかった。おまけに10F役員には十分なアテンドもつけていない。とても予定時刻の17:30に始められると思えなかった。案の定17:25をすぎても選手団はおるかメダリストも、開会宣言に欠かせない10F会長オーケ・ヤコブソンの姿もなかった。

「もともと10分は遅らせるつもりでした」と頼口は意外なほど冷静だった。さらに遅れるようなら、国の紹介を先に済ませてしまうという柔軟な対応を示唆して、表に出て選手たちを和服で迎えているうちにオーケとプレゼンターを務めるヒュー・カメロンがやってきた。

綱渡りのようなきわどさで17:40に式典開始。ファンファーレの代わりに尺八、ヒューが気を回して、福田さんと交代したので、はじめから女子のプレゼンターと決ま

っている僕と福田さんがいずれも和装で男女それぞれのプレゼンターをやることになった。優勝者へのプレゼントの扇子も冴えた。初のアジアでの開催こひさわしい、印象深い開会式となった。

もともとこの選手権では、「裏技的に日本風を打ち出すつもりだった。イベントセンターでは休養日にお茶席を設け、色紙に筆で選手の名前を漢字で書いてやるサービスも計画した。石原には「先生は権力者なんだから、いい加減なこと思いつきで言っちゃだめです。みんな振り回されちゃうじゃないですか。」と言われていたが、お茶席も、書道のサービスも思いつきにしては大人気のコーナーとなった。書道の方は380人の選手オフィシャルに対して、400枚以上の色紙を出したようだ。中には「俺の彼女の名前を書いてくれ」「妻と子どもの名前は...」といった注文が相次いだ。



いつもの大会にも増して重要だったのが給水。ここには地元の高校生をはじめ、OLC 東海のメンバーが活躍した。

## 役員も疲れているが...

8月11日

コンパクトなコース、比較的ならかな地形、スタートとフィニッシュが隣り合わせになっている会場配置。ミドル決勝のこの日はもっとも安心して見ていられるイベントだった。選手なら誰でも出られることに急遽決まったBレースがばたつくくらいで、心配な要素はほとんどなかった。

スタート地区で決勝スタートをスタンバイしているとき、プランナーの入江が、Bレースの地図がぎりぎりかもしれないと言ってきた。バカントを入れてもBの出場者は48人。地図は十分のはずだ。だが、入江は53人はいるはずだという。なぜ僕の言う数と彼の数とが違うのだろう。僕はさっきスタート役員のリストを見て確認したのに、不思議に思ってそのリストと入江のリストを対比させてみた。なんと翌日のロングのBレースと間違えてリストを用意していたのだ。時間は十分にあったので、その



好評を博した書道のサービス(左)。選手が使う屋外のブルーシートを拭く役員たち。こんなこともひょっとしたら「ジャパネスク」に映ったのではないだろうか。



間 IT パートに依頼してリストを間に合わせる事ができた。役員も疲れ初めていた。昨日の役員ミーティングは、疲れと緊張で随分と雰囲気も悪化していた。あと一日の我慢だ。こんな時ほど、ゆとりを持って乗り切らなくては。

ロングに向けてのこの日の監督会議では冒頭でいかにも疲れたふりをして、「役員も疲れてきたが・・・」と始めた。そして、「監督諸君も、トリビアルな質問をするのに疲れていてくれたら嬉しい」と結び、優勝者のシモーネとティエリーの優勝をたたえ、水のボトルを渡した。このパフォーマンスが功を奏したのか、彼らが本当につまらない質問に疲れてしまったのか、この日の会議は大した質問のないままに終わった。ロング決勝で、男子に2箇所の給水を追加したり、最後の給水に医者を置くなど、暑さによる選手の健康に十分な配慮をしていることも評価されたのかも知れない。

それまでも、輸送パートは十分すぎるほどチーム側の要求に答え、連日のようにバスのスケジュールをいじって、チームが移動しやすいようにしていた。小さなミスは出たものの、こうした柔軟でチームの身になった対応がスタッフとチームがともに世界選手権を作り上げていくという一体感を生み出していたのかも知れない。

チームに対してというよりも、役員を励ます意味で、監督会議の資料を、英語とわざと日本語で「もうひとつがんばりだ!」と締めくくった。



役員も疲れているが、監督も疲れている。  
監督会議を待つ間にイベントセンターで昼寝するロシアの監督たち

## 人生最大につきまぐった日々

ロングのラップを公開した後、ブルガリアの女子選手から、最終コントロールからのラップがおかしいという指摘があった。Eカードのクロックは実際の計時に使う時計とは異なっていることがあるし、もともとEカードのラップは非公式の資料という位置づけであったから、僕も的場もあまりこのことには気にしなかった。

ところが、この日エストニアの選手から、「自分の時計と図った全体タイムと40秒くらい早いタイムが結果となっている」という正式な調査依頼があった。彼はJMOCの運営者を経験しており、苦情というよりも、そのような事態が決勝の信頼性を損ねる可能性があるという運営者サイドに立った考え方をしていたようだ。

野教センターに帰ると、玄関先で的場に出会った。誤差のことを話すと、的場はそこにあった踏み台を机代わりにして、暗い中ですぐにパソコンを開き、計時のログを確認し始めた。

今回の計時では、ゴールにある光電管のシグナルで選手のゴール時刻を確定し、それに手入力で選手の番号を割り当てる。役員が通ったり、興奮したプレスが入ってきたり、シグナルが多く記録された場合、余分なシグナルを除去する作業を直に行う必要がある。そうしないと、システムは選手の番号を時間的に最も早いシグナルに割り当ててしまうので、実際よりも早いタイムが計時される。こうした誤対応が全体に影響しないように、時々、区分のための

信号を与えてやっているのに、誤対応があっても、その影響はせいぜい3つか4つなのだが、ゴールの間隔が開いているときには、タイムの誤差は数十秒に及んでしまう。

記録を調べたところ、その選手を計時したブロックに誤ったシグナルが除去されずに対応していることがわかった。誤シグナルを除去すると、タイムの誤差は約40秒となるはず。彼が申告しているとおりだった。

「最終コントロールからのタイムが異様に早い選手を探してみるのが正しいアプローチと思われます。」的場は、冷静にこう言い放つと、予選全てのラップを探して、最終コントロールからのラップタイムがおかしい選手を洗い出した。その結果、前からラップがおかしいと指摘しているブルガリア選手のラップだけが該当した。再び、エストニア選手がゴールしたブロックを見ると、当該のブルガリア女子選手、そして予選で1位となったブローニ・ケーニツ・サルミの名前が挙がってきた。ブローニのタイムの誤差は1秒。順位にも影響しない誤差だった。では、ブルガリア選手は？予選のヒートごとのラップ表を再確認していた的場が、事態とは不似合いなくらい冷静な調子で、「嫌な感じですね」とつぶやく。彼女はなんと15位だったのだ！正式なタイムでは順位が下がってしまうかも知れない。彼女の代わりに誰かが予選を通過すべきだったのかも知れない。さすがに二人で氷ついた。

16位の選手のタイムを調べてみて、二人で大笑いした。なんと1分20秒も離れていたのだ。計測の信頼性に大きな一撃を食らわせる事態になりかねなかったが、全くの偶然でそれを回避できていたのだ。この上ないほどの幸運だった。

僕にはそれで十分だったが、的場はその後も追及の手を緩めず、正規の作業の合間を縫って、たくさんの「証拠」と関係者の証言を集めた。担当者はどうやら誤シグナルには気づいたが、なぜかその処理を忘れていたのだという。

ここからは掛垂小説の領域になるが、ブロックの直前に元木がゴールしていたことも判明した。役員もそのタイムに興奮していたのだろう。誤シグナルも、おそらく元木のゴールに興奮したプレスが観客の通過によるものだったのではないだろうか。日本チームの活躍はこんなところにも副産物を提供した。

8月12日

この日はロング決勝である。決勝となると、対象になる選手は男女45人づつ。スタートも1レーンで、それぞれに全て同じ地図を使う。スタートも宿舍の野教であり、時間的にも余裕がある。初めて「朝のボロでもしようかな」という気になり、前日のミーティングで立候補した。ロングという

広範囲にわたるコースでもあり、その手助けになればという軽い気持ちでもあったが一方で、まだ一度も自分の目でチェックしたこの北のエリアを見ておきたいという気持ちもあった。

最初のいくつかのコントロールでは、沢の中の高さにやや不満はあったが、木槌で打たれた杭は、もはや変更できるような状態ではなかった。そして7つ目のコントロール。ここだと思ふ沢の中ではなく、隣の小さな沢の中にコントロールがついていた。それがあまりに小さかったので、最初は一つの沢が地図に表現できない沢に分かれているのかと思ったが、周囲の特徴物との関係を見ると、やはりおかし。北の沢ではなく、中央の沢についているのだ。

また時間的余裕はあったから、ショックというよりも、これだけのチェックを経て、まだ間違いが残っていることに感動さえ覚えた。給水までチェックを済ませると、役員から車を借りてフィニッシュに行き、プランナーの田代に報告。スタート30分前には無事解決。

残念なことに併設で不成立を1回出してしまった他には、致命的にもなりかねないミスを引きといて予防したり、あるいは致命的な結果につながらずに済ませたことが何度もあった。こうした人生最大のつきの良さは、常にこの一週間、最もミスが起こりそうな場所はどこだろうと考え、自分のできる範囲で最後の最後まで手を抜かずにチェックを続けた努力へのご褒美なのだろう。

この日のレースは長かった。ロングでは、春先の試走で、絶対に距離が短すぎると思っていたので、少しづつ長くしていったことに対して、アドバイザーから「俺は長いと思う。もしお前のいうとおりだったらビールをいっぱいご馳走してやるよ」と言われていたので、その勝負の行方も気になった。ゴールに帰ってみると、女子はシモーネが73分を出し、ほぼ予想通りのタイムになっていたが、男子はトップがまだ100分を超えていた。そのうち、ロシアのハラモフが97分でゴールし、なんとかかっこがついた。

この日は、よりハードなレースを制したシモーネに丸ごとスイカを、ロシアのハラモフには大きな水のボトルを贈った。そして、アドバイザーのトニーには、91分というウィニングタイムが出なかったことに対して、ビールを贈った。

## 冥土の土産

8月13日

レースがない。早起きする必要がない。椅子に座って朝食をとる。それだけで十分すぎるくらい嬉しかった。JOA 会長のお



左：アドバイザーからも絶対的な信頼を得たITパートと、深夜に及ぶ準備作業を続けたスタートパート



人事と会場というハード・ソフト両面を取り仕切った山徳、大野夫妻。

供で豊田に行き、10Fの会長会議に出席する。今回唯一10Fの理事らしい仕事をする。会長会議は午後の13時までだが、そこまで出席しては、午後の監督会議の打ち合わせが間に合わない。11時には早々に切り上げる。

この日は競技責任者の若梅さんが、スタートやフィニッシュ、会場など中心となる役員を集めて午後1時にミーティングを開いてくれた。リレーは会場に全てが集まるという意味で楽しいイベントだが、反面未知のミスが起こる可能性もある。リレーの責任者は、若梅さんが途中からリクルートした息子さんの友則君が務めていた。彼の穏やかな語り口を聞いてみると、この世の中には困ったことなど何もないのだという気になる。

彼の語り口のように、この日の監督会議には、困った質問もいらないようにならないう質問もなかった。アドバイザーのトニーが最後に主要な役員に礼を述べ、ささやかなビールパーティで締めくくった。この日の言葉は「最後までがんばるぞ！」選手にも役員にもふさわしい言葉だ。

夜のミーティングも和やかに進んだ。世界選手権の運営ができるのも、あとたった1日なのだ。もう終わるといってほっとした気持ちよりも、この緊張感と充実感をもう少し楽しんでいたい、そういう気持ちの方が強かった。

2000年に世界選手権が決まったとき、当時60歳代半ばで、「そのころはもうオリエ

ンテーリングなんてできないわ」という石田夫妻に、「冥土の土産だと思ってやってください」と言ってから5年。石田夫妻はできないどころかスタートの中心役員として、毎日3、4時間の睡眠で運営を続けていた。次に世界選手権がやってくるのは25年後だろうか。僕が70歳。せいぜいボランティアをやっているのが関の山だろう。「僕自身冥土の土産と思って運営します。」と役員ミーティングで挨拶した。

8月14日

リレーには男女それぞれ27版のコース図が使われる。何度もチェックしたが、漠然とした不安はぬぐえなかった。コントロールに関して、何度も確認し、倒れやすいコントロールはチェックしなおし、もはや問題は一つも残っていないように思えたが、やはり走者が帰ってくるまで不安だ。

朝、会場レイアウトを見てみると、コーチングゾーンが広すぎたり、地区配布所のつくりがやや改善の余地があったものの、それらは十分すぎるくらいの時間で、容易に改善することができた。安心感と不安が複雑に交錯していた。

筋書きのあるドラマのようにレースが始まり、興奮の中であっさりレースが終わるのである。そう考えながら、会場を歩きまわっているとき、Eカードのユニットの動作不良があったという報告があった。なお悪いことに、担当の塩崎は出力を読み間違い、別のコントロールにユニット交換を出してしまっていた。それはすぐに訂正されたが、確認した全てのユニットで、今

度は問題なしの表示が出た。問題なしと出た場合でも、ユニットは2割程度の確率で動作しなくなる。矛盾した情報に、コース管理部門はパニックになりかけた。8:45分までにシューティングできなければ、スタート延期もありえる。その間に、人を配置して、バックアップラベルに加えて人的バックアップも加えるか。その人材は？的場に相談すると、人的バックアップはありがたいというが、結局トニーと相談して、バックアップラベルのみでいくことにした。競技規則上はそれで十分だし、あとは失格の判定手続きを慎重に行えばいいだけの話だ。ユニットの不良は、今となっては、ちょっとしたスパイスだった。

9時に女子がスタート。女子の1走のタイムは41分の予定。1周目のループは短くて14分が予想タイムだ。13分30秒でトップ集団がグラウンド南東の広場に姿を見せた時には、思わずガッツポーズ。その後1走はきっちり41分でゴールした。

男子の1走はやや時間がかかったものの、予想44分に対して45分でゴールした。コースは易しいが、意外と差ができるだろう。そう予想していたが、展開もほぼその通りになった。その割に上位チーム内でも入れ替わりのあるリレーの醍醐味を十二分に

に味わえる展開となった。男子1走では山口がループ1周目でもフィニッシュ時にも過去の日本選手最高の6位で回るなど、会場を十分に沸かせてくれた。

3走ではコースパターンが変わるが、ループごとの予想タイムはまたもプリテン記載とおりだった。脚本家になってドラマを自分の意のままに演出している気分だった。昨日トニーに取られたビールは倍にして返してもらってもいいだろう。今日、監督会議がないことが残念だ。

8月15日

再びレースのない、早起きする必要のない朝。他の役員とゆっくりと朝食をとり、それでも、9時前にはイベントセンターに向き、25人ほどで片付けをする。それほど広くないイベントセンターだが、片付けにはほぼ丸一日がかりだった。昼前にナショナルチームの宮内、加納、松澤がやってきて、地図の整理を手伝ってくれた。売れ残った商品や、チームからもらった記念の品が、即興のオークションやくじ引きにかかる。シモーネのサインの入った大判の地図がなぜか役員価格よりもさらに安い1500円で落札されたり、ノーネームのウェアを上下各1000円に設定したら、売れ残りの半分くらいが片付いたり。作手に100日

以上通って、この2週間は毎日隣で半日以上過ごしていたのに、一度も言ったことなかったル・シュールで宮内や学生役員たちとのんびり昼食をとった。本当に楽しい片付けだった。

2000年のワールドカップを無事終えた翌朝、コントローラのデービッド・ホッグに「どんな気持ちだい？」と聞かれて、「戦には勝ったが、多くの兵を失った将軍」の気分だと答えた。ノルウェーのような国でさえ、世界選手権の直後はその地域の活動が低下したという。世界選手権を成功させるだけでなく、その後の疲弊を最小限に抑えることは、準備時からの重要な課題であった。

シャクルトンのように「たとえ極点に到達することができなくても、一人の隊員も失うことなく帰国できた」のだろうか？その答えは、まだ出ていない。世界選手権によって得られた様々な遺産を活用し、これからは確実に日本の、そしてアジアのオリエンテーリングが発展し、社会的な地位を確立する。そしてその象徴として、25年後の世界選手権で、今度こそ表彰台に選手を登らせること、その時初めてこの世界選手権の評価が正当にくださるのだろう。

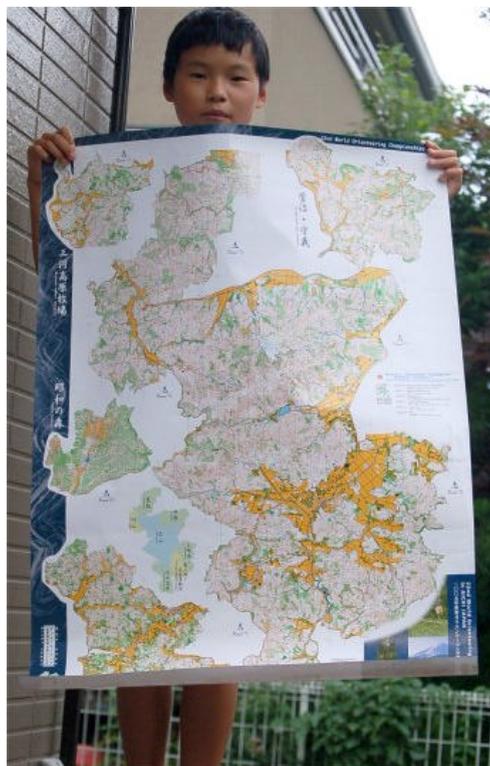
(村越 真)

## お宝グッズ登場



ミネラルウォーター  
WOC2005のロゴと地図のラベル

真夏の日本はハンパじゃない！ 熱中症にならないためにも水分補給は必要だ、特に1週間以上にわたる世界選手権に参加観戦している人にとって水分補給はそのまま体調管理だった。この水は硬度14の超軟水。消耗した体に素早い水分補給をするという水源は愛知か？ いやそうではなく日本の名水 中央アルプス駒ヶ根高原だ。来年のクラブカップに向けて気も入るッパイ。



### 巨大 O-map

世界選手権関連の地図を1枚に納めた巨大O-map。世界選手権の競技範囲を中心にトレーニングトレインまですべて1枚にまとめられている。

縮尺は1:10,000を基本にしているが、入りきらない飛び地は1:15,000も使用している。

この地図は併設大会の全日程参加者にプレゼントされたもの。

この地図を使って超ロングオリエンテーリングをやってみたくなる